

## 告 辞

本日晴れて東京農工大学より学位を取得された皆さん、おめでとうございます。  
また、これまで陰になり日向になり支えてこられたご家族の皆様をはじめとする関係各位にも、心よりお祝い申し上げます。ここにこうして平成26年度卒業式・修了式を無事挙げる運びとなりましたことを、教職員一同大変嬉しく思っております。

本日学位を取得されたのは、工学部の学士が3名、工学府の修士が5名、博士が9名、論文博士が1名、農学府の修士が12名、生物システム応用科学府の博士が6名、修士が1名、連合農学研究科の博士が12名、論文博士が2名の計51名です。この51名の皆さんは、これからさらにその専門性を深め高めつつ、それぞれの進路で社会人として、また研究者・技術者としての道を歩み始めることとなります。本学での日々は必ずしも順風満帆ではなかったでしょう。実験がどうしても上手くいかず研究が進まないなど様々な困難や苦労があったとは思いますが、悪戦苦闘、試行錯誤、忍耐と努力を重ねてそれらを乗り越え、ついに今日の日を迎えました。まずはそのことを誇りに思ってください。同時に、皆さんに係わる多くの人々がそうした日々を時に暖かく包み込み時に厳しく叱咤激励しながら見守り支え続けて下さったことを思い返し、感謝の思いを新たにしたいと思っております。そして皆さん、これからは皆さんが周囲の支えとなり力となるよう尽力する番です。

ウィンストン・チャーチルの言葉に、

“We make a living by what we get, but we make a life by what we give.”

というものがああります。お分かりの通り、“living”つまり生活と”life”つまり人生は違うものです。私たち人間は周囲から得るもので生活を成り立たせます。経済的または物質的な意味だけではありません。知識、経験、人間関係、得るものすべてが私たちの日々の生活の糧となるもので、それらがあってこそ私たちは生きていくことができます。しかしその生活の積み重ねだけが人生なののでしょうか？ 真の意味で人生を考える時、一人の人間としてその人生は何であったのか、生きる意味というものを考える時、本当に重要な要素となるのは何を周囲に与えたか、周囲から得たものをどのように還元するのか、なのです。皆さんがこれから皆さんの人生を形作っていく上で、このことを忘れずに一日一日を大切に過ごし、自分に今何がで

き、何をすべきなのかを真剣に考え、自分の行動に責任を持って歩んで行ってほしいと思います。

世界は今皆さんの力を必要としています。度重なる自然災害は地球の悲鳴であり、次の世代へつながる美しい世界を作るためには国際的に協調しながら人智を尽くして打開策を創造しなければなりません。私たちのような科学研究に携わる者に寄せられる期待と責任はますます大きくなってきているのです。社会全体に、人々の生活に、未来に、真に役立つ研究をし、より早くしかも完全に確かな成果をあげることが求められています。私たち東京農工大学は、今まで皆さんが真理を追究する喜びを感じられるよう、また、科学者としての潔癖さ、課題解決のための柔軟な思考、俯瞰的視野、あきらめずに壁を乗り越え自らの考えで行動する力を持った真の研究者・技術者となるよう、そして日本やそれぞれの母国、ひいては国際社会の期待に応え得る人材となるよう全力を注いでサポートしてまいりました。それを受け、皆さんはこの大学生活を全うした自信と専門家としての誇りを胸に、持てる力を最大限に発揮して困難にくじけることなく活躍していただきたいと思っています。それこそ、皆さんの人生を作るもの、チャーチルの言葉にある“what we give”であり、皆さんの人生をより有意義で充実したものにしていくのです。

皆さんの今後のご活躍を、同じ研究者として心より応援しております。そして必要とあればいつでも本学を、そして私たちを頼って来て下さい。一緒に道を探し前進していきましょう。本学も皆さんの力と誇りになれるよう、機動力と柔軟性を武器に最先端の研究を担う大学としてより一層努力を重ねていく所存です。皆さんのこれからの奮闘と輝かしい将来に期待し、そして最後に本学の更なる発展と皆さんの後に続く後輩たちのために今後も同窓会活動等を通じてご支援下さるよう併せてお願い申し上げ、ここに告辞とさせていただきます。

平成26年9月17日

東京農工大学長 松永 是